

今日の兼好

令和の徒然草

ヒモ、恋、そして洗濯物

長編恋愛コメディ

花は盛りに。人生は、完成しすぎん方がええ。

今日の兼好 令和の徒然草

- ヒモ、恋、そして洗濯物 -

本作は、連作『今日の兼好』を長編小説として再構成したフィクションです。吉田兼好『徒然草』の章段を、令和の恋愛、仕事、家事、自由、そして『ヒモ』という妙に現代的な生存戦略へ重ねています。古典の言葉はしばしば主人公に都合よく誤読され、玲子によって訂正されます。そのズレこそが、本書の笑いと主題です。

登場人物

兼好 - 元研究者。京大院卒。現在は『暮らしを整える専門職』を自称。

玲子 - 女医。兼好の帰る場所にして最大の査定者。

早江 - アパレルブランド社長。恋愛にも監査を持ち込む女。

ナリン - バンコクの女性経営者。兼好をヒモではなく戦略顧問にした女。

目次

第一部 東京 - ヒモの原理

- 第1章 女医の家に住む男 …… 5
- 第2章 ヒモにも盆休みはあるんか …… 15
- 第3章 海の女神、翌朝は焼き鮭 …… 25
- 第4章 ゴミ出しの日に恋は始まる …… 35
- 第5章 ラブホテルは町内会より安全か …… 45
- 第6章 結婚はプロヒモの正社員化 …… 55

第二部 早江 - 結婚から逃げた先

- 第7章 渋谷に現れた女社長・早江 …… 65
- 第8章 男にも値札はある …… 75
- 第9章 恋愛デューデリジェンス …… 85
- 第10章 逃げ道は婚礼会場へ直結する …… 95
- 第11章 徒然草を言い訳に使うな …… 105
- 第12章 自由を欲しがる男の不自由 …… 115

第三部 上海 - 愛は KPI だった

- 第13章 上海、最上階 …… 125
- 第14章 恋人に KPI、あるん？ …… 135
- 第15章 抱擁、八十二点 …… 145
- 第16章 豪華な食卓、会話ゼロ …… 155
- 第17章 わし、ヒモやない。業務委託や …… 165
- 第18章 撒収は敗北やない。分散投資どす …… 175

目次（続き）

第四部 バンコク - 善意は恋にあらず

- 第 19 章 バンコクの朝、ヒモコン再起動 …… 185
- 第 20 章 善意は恋にあらず …… 195
- 第 21 章 Split Bill …… 205
- 第 22 章 何ができますか？ …… 215
- 第 23 章 元研究者の片鱗 …… 225
- 第 24 章 恋のつもりが採用通知 …… 235

第五部 帰る場所 - 花は盛りに

- 第 25 章 玲子から着信 …… 245
- 第 26 章 帰国便と未練の重量制限 …… 254
- 第 27 章 逆ナンされても、帰る男 …… 263
- 第 28 章 花は盛りに、女は若さにあらず …… 272
- 第 29 章 四文字の魔法 - おかえり …… 281
- 第 30 章 徒然草には、そこまで書いてへん …… 290

あとがき …… 299

『徒然草』との対応メモ …… 300

女医の家に住む男

『徒然草』第10段・第8段

「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ／世の人の心惑はす事、色欲にはしかず。」

朝の光は、いつも人間を少しだけ正直にする。けれど兼好の場合、正直になる前に言い訳が起きる。

東京の玲子の部屋。朝の珈琲と白衣の気配。京大院を出て研究畑を歩いた兼好は、なぜか女医・玲子の家で『暮らしを整える専門職』を名乗っている。本人はヒモを否定するが、家賃負担はゼロである。

この日の最初の出来事は、パナマ・ゲイシャを淹れることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「あんた、今日の仕事は？」

玲子は、まっすぐ兼好を見た。

珈琲の香りと、生活費ゼロの現実。それが、この章の始まりだった。

兼好は珈琲の香りと、生活費ゼロの現実を頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

その日、東京は妙に静かだった。静かな日は、兼好の頭の中だけがよく喋る。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は冷蔵庫の中身を勝手に資産査定する。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「稼ぐ人の心と暮らしを整える仕事です。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。玲子の当直明けの愚痴を聞くという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「日本語では、それをヒモって言うの。」

玲子は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第10段・第8段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『洗濯物を妙に几帳面に畳む』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「稼ぐ人の心と暮らしを整える仕事です。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。自分の肩書きを考え直す。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「あんた、今日の仕事は？」

玲子は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

珈琲の香りと、生活費ゼロの現実という言葉が、急に冗談ではなくなる。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、パナマ・ゲイシャを淹れるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「稼ぐ人の心と暮らしを整える仕事です。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第10段・第8段。

「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ／世の人の心惑はす事、色欲にはしかず。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、冷蔵庫の中身を勝手に資産査定するを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。玲子の当直明けの愚痴を聞くが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「稼ぐ人の心と暮らしを整える仕事です。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、洗濯物を妙に几帳面に畳むの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「あんた、今日の仕事は？」

冗談で受け流すには、玲子の目が少し真面目すぎた。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

珈琲の香りと、生活費ゼロの現実。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。自分の肩書きを考え直すを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「高級ホテルを宿屋とは呼ばんでしょう。」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

『徒然草』第10段・第8段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

ヒモにも盆休みはあるんか

『徒然草』第75段

「つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。」

兼好には悪い癖がある。目の前の出来事を、すぐ経営用語か『徒然草』で説明したがることだ。

土曜の朝。玲子はベッド、兼好は温泉雑誌。世間の盆休みを前に、兼好は『ヒモにも休暇が必要』と主張する。玲子は毎日休みだと言うが、兼好は二十四時間勤務説を展開する。

この日の最初の出来事は、温泉雑誌で逃亡先を探すことだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「ヒモは二十四時間勤務や。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

自由を欲しがる男ほど、自由に弱い。それが、この章の始まりだった。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

玲子がいる場所では、空気に独特の張りがある。兼好はそれを『機嫌という気圧配置』と呼んでいた。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は朝は機嫌、昼は話、夜は愚痴という勤務表を作る。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「給料払ってないけど？」

兼好は返事を探したが、玲子の視線の方が一秒早かった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。労基署への架空相談を始めるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「そこが最大の労基違反や。」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第75段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『玲子から一日自由を与えられる』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「給料払ってないけど？」

玲子は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

逃げ道ばかり探す者は、いつか出口の外で迷子になる。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。自由になった途端に居場所を失う。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「ヒモは二十四時間勤務や。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

自由を欲しがる男ほど、自由に弱いという言葉が、急に冗談ではなくなる。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、温泉雑誌で逃亡先を探すの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「給料払ってないけど？」

玲子は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第75段。

「つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、朝は機嫌、昼は話、夜は愚痴という勤務表を作るを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。労基署への架空相談を始めるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「給料払ってないけど？」

玲子は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

逃げ道ばかり探す者は、いつか出口の外で迷子になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、玲子から一日自由を与えられるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「ヒモは二十四時間勤務や。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

自由を欲しがる男ほど、自由に弱い。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。自由になった途端に居場所を失うを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「じゃあ今日、休んでいいよ。」

玲子は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

『徒然草』第75段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

海の女神、翌朝は焼き鮭

『徒然草』第137段

「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。」

男の自信というものは、根拠が薄いほど音が大きい。兼好の脳内ヒモコンは今日も起動音だけは立派だった。

海から帰った翌朝。玲子の背中では真っ赤。前日は海辺で完璧に見えた玲子が、翌朝は日焼けで身動きもつらい。兼好は軽口を叩きながら冷却ジェルを塗り、近くにいる者だけが知る不完全さを学ぶ。

この日の最初の出来事は、玲子が『いたっ』と声を上げることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「昨日は海の女神。今日は焼き鮭どすな。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

保冷剤と、近くで見える弱さ。それが、この章の始まりだった。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

人生の分岐点は、もっと荘厳な顔をして現れると思っていた。実際にはスマホの通知だったり、洗濯籠だったりする。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は冷却ジェルを持って兼好が現れる。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「その口から先に冷やそか？」

玲子の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。焼き鮭発言で命の危機という事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「……塗って。あんた、手ぇ冷たいから。」

玲子は、まっすぐ兼好を見た。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第137段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『無言で背中を手当てする』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「その口から先に冷やそか？」

その言葉を言った玲子の方が、兼好よりずっと平然としていた。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。玲子が『幻滅した？』と小声で聞く。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「昨日は海の女神。今日は焼き鮭どすな。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

保冷剤と、近くで見える弱さという言葉が、急に冗談ではなくなる。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、玲子が『いたっ』と声を上げるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「その口から先に冷やそか？」

その言葉を言った玲子の方が、兼好よりずっと平然としていた。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第137段。

「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、冷却ジェルを持って兼好が現れるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。焼き鮭発言で命の危機が思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「その口から先に冷やそか？」

玲子はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、無言で背中を手当てするの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「昨日は海の女神。今日は焼き鮭どすな。」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

保冷剤と、近くで見える弱さ。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。玲子が『幻滅した？』と小声で聞くを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「盛りの時だけ見て好きや言うんは、観光客どす。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

『徒然草』第137段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

ゴミ出しの日に恋は始まる

『徒然草』第8段

「世の人の心惑はす事、色欲にはしかず。」

女は沈黙し、男は喋りすぎる。少なくとも、兼好と玲子のあいだではそれがひとつの自然法則だった。

朝のゴミ集積所。町内会の視線が妙に鋭い。兼好は近所のシングルマザーから相談を受ける。話を聞いただけのつもりが、『今度ゆっくり』という言葉で脳内ヒモコンが起動する。

この日の最初の出来事は、資源ゴミの袋を持って立ち話することだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「今度、ゆっくり話したいな。」

その言葉を言った女性の方が、兼好よりずっと平然としていた。

ゴミの分別より難しい好意の分別。それが、この章の始まりだった。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

朝の光は、いつも人間を少しだけ正直にする。けれど兼好の場合、正直になる前に言い訳が起きる。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は子育てと仕事の愚痴を聞く。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「相談は無料、延長は珈琲一杯どす。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。近所のカフェは人目があると言われるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「ゴミ出しに何分かったの？」

玲子の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第8段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『兼好が善意と好意の境界を測る』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「相談は無料、延長は珈琲一杯どす。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。玲子にゴミ袋の種類だけを聞かれて挙動不審になる。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「今度、ゆっくり話したいな。」

女性はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

ゴミの分別より難しい好意の分別という言葉が、急に冗談ではなくなる。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、資源ゴミの袋を持って立ち話するの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「相談は無料、延長は珈琲一杯です。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第8段。

「世の人の心惑はす事、色欲にはしかず。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、子育てと仕事の愚痴を聞くを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。近所のカフェは人目があると言われるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「相談は無料、延長は珈琲一杯どす。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、兼好が善意と好意の境界を測るの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「今度、ゆっくり話したいな。」

女性の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

ゴミの分別より難しい好意の分別。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。玲子にゴミ袋の種類だけを聞かれて挙動不審になるを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「人生相談は分別に時間がかかるんです。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

『徒然草』第8段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

ラブホテルは町内会より安全か

『徒然草』第52段

「仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ。」

人は大事件の前に、案外どうでもいいことをしている。兼好も同じで、まず珈琲の温度を測っていた。

二駅離れたホテル街。入口で最悪の知人に遭遇。相談相手から『人目を避けるならラブホテル』と提案される。兼好は合理性に納得しかけるが、入口で町内会長と鉢合わせし、途中までの理解が最も危険だと知る。

この日の最初の出来事は、女子会利用もあると説明されることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「ここ、会議室より安いんやな。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

目的地を取り違える仁和寺の法師。それが、この章の始まりだった。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

兼好には悪い癖がある。目の前の出来事を、すぐ経営用語か『徒然草』で説明したがることだ。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は兼好が会議室代との比較を始める。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「そういう感想になる？」

その瞬間、女性との距離が一センチだけ変わった気がした。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。ホテル入口で町内会長と目が合うという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「……防災点検ですか。」

町内会長は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第52段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『双方が同時に『違うんです』と言う』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「そういう感想になる？」

女性の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。帰宅後玲子にホテルのポイントカードを見られそうになる。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「ここ、会議室より安いんやな。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

目的地を取り違える仁和寺の法師という言葉が、急に冗談ではなくなる。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、女子会利用もあると説明されるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「そういう感想になる？」

女性の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第52段。

「仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、兼好が会議室代との比較を始めるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。ホテル入口で町内会長と目が合うが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「そういう感想になる？」

女性の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、双方が同時に『違うんです』と言うの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「ここ、会議室より安いんやな。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

目的地を取り違える仁和寺の法師。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。帰宅後玲子にホテルのポイントカードを見られそうになるを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「会長こそ、ずいぶん個人的な防災で。」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

『徒然草』第52段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

結婚はプロヒモの正社員化

『徒然草』第190段

「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。」

旅先では人は少し大胆になる。兼好はもともと大胆なので、旅先ではだいたい余計なことをする。

ウェディングサロン。見るだけのはずが最終相談。玲子の結婚願望に押され、兼好はウェディングサロンへ。ウェディングドレス姿の玲子には本気で見惚れるが、結婚を『ヒモの正社員化』と定義して逃走経路を探す。

この日の最初の出来事は、見るだけが最終相談になることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「……綺麗や。これは反則どす。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

白いドレスと、逃亡不可の契約。それが、この章の始まりだった。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

男の自信というものは、根拠が薄いほど音が大きい。兼好の脳内ヒモコンは今日も起動音だけは立派だった。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日はドレス姿の玲子で劇画モード発動。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「私はもう、何周も待ってるけどな。」

玲子は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。春か秋かを聞かれ逃げ道が消えるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「結婚いうんは、プロヒモの正社員化や。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第190段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『ヒモコンが責任・親族・逃亡不可を警告』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「私はもう、何周も待ってるけどな。」

兼好は返事を探したが、玲子の視線の方が一秒早かった。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

カードの色は黒くても、心の赤字を埋めるとは限らない。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。夜にマッチングアプリを開く。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「……綺麗や。これは反則どす。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

白いドレスと、逃亡不可の契約という言葉が、急に冗談ではなくなる。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、見るだけが最終相談になるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「私はもう、何周も待ってるけどな。」

兼好は返事を探したが、玲子の視線の方が一秒早かった。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第190段。

「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、ドレス姿の玲子で劇画モード発動を思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。春か秋かを聞かれ逃げ道が消えるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「私はもう、何周も待ってるけどな。」

玲子は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

カードの色は黒くても、心の赤字を埋めるとは限らない。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、ヒモコンが責任・親族・逃亡不可を警告の後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「……綺麗や。これは反則どす。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

白いドレスと、逃亡不可の契約。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。夜にマッチングアプリを開くを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「その言い方、式場でだけはやめて。」

玲子は、まっすぐ兼好を見た。

『徒然草』第190段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

渋谷に現れた女社長・早江

『徒然草』第92段

「二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。」

『徒然草』は七百年も前の本である。ところが兼好が読むと、なぜか今夜の恋愛相談に見えてくる。

渋谷のブランドラウンジ。黒髪ボブの早江。マッチングアプリで知り合ったアパレルブランド社長・早江。兼好は『結婚願望なし・束縛嫌い』を避難経路と読むが、早江は男を商品以上に厳しく査定する。

この日の最初の出来事は、対面三秒だけ劇画美男子になることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「お仕事は？」

兼好は返事を探したが、早江の視線の方が一秒早かった。

第二の矢を持つ男の油断。それが、この章の始まりだった。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

女は沈黙し、男は喋りすぎる。少なくとも、兼好と玲子のあいだではそれがひとつの自然法則だった。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は職業を聞かれる。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「稼ぐ女性の心と暮らしを整える仕事です。」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。ヒモを高級ブランドに例えるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「つまり、ヒモ？」

冗談で受け流すには、早江の目が少し真面目すぎた。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第92段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『早江が初めて笑う』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「稼ぐ女性の心と暮らしを整える仕事です。」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

カードの色は黒くても、心の赤字を埋めるとは限らない。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。兼好が第二の矢を持った気になって油断する。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「お仕事は？」

早江は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

第二の矢を持つ男の油断という言葉が、急に冗談ではなくなる。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、対面三秒だけ劇画美男子になるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「稼ぐ女性の心と暮らしを整える仕事です。」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第92段。

「二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、職業を聞かれるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。ヒモを高級ブランドに例えるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「稼ぐ女性の心と暮らしを整える仕事です。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

カードの色は黒くても、心の赤字を埋めるとは限らない。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、早江が初めて笑うの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「お仕事は？」

早江は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

第二の矢を持つ男の油断。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。兼好が第二の矢を持った気になって油断するを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「高級ブランドを、ただの布とは呼ばんでしょ？」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

『徒然草』第92段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。玲子のため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

男にも値札はある

『徒然草』第38段

「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ。」

その日、東京は妙に静かだった。静かな日は、兼好の頭の中だけがよく喋る。

早江のオフィス。窓の外は渋谷の夜景。早江は兼好に『いくら欲しいの?』と訊く。兼好は値札を拒み、心のほつれを直すのが先だと言う。だが実際には自分こそ他人の資産を値踏みしてきた。

この日の最初の出来事は、早江の売上資料を一瞥することだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「いくら欲しいの?」

早江の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

値札を嫌う男ほど相手を査定する。それが、この章の始まりだった。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

人は大事件の前に、案外どうでもいいことをしている。兼好も同じで、まず珈琲の温度を測っていた。

兼好は人を見ると、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は値段を聞かれて言葉を選ぶ。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「初対面で自分に値札を付けるんは三流どす。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。兼好がブランド価値論を展開するという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「あなた、赤字だけどブランド価値はあるのね。」

早江の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第38段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実は伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『早江が赤字部門の相談を始める』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「初対面で自分に値札を付けるんは三流どす。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

カードの色は黒くても、心の赤字を埋めるとは限らない。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。兼好が自分の市場価値を鏡で確認する。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「いくら欲しいの？」

その言葉を言った早江の方が、兼好よりずっと平然としていた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

値札を嫌う男ほど相手を査定するという言葉が、急に冗談ではなくなる。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、早江の売上資料を一瞥するの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「初対面で自分に値札を付けるんは三流どす。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第38段。

「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、値段を聞かれて言葉を選ぶを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。兼好がブランド価値論を展開するが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「初対面で自分に値札を付けるんは三流どす。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

カードの色は黒くても、心の赤字を埋めるとは限らない。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、早江が赤字部門の相談を始めるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「いくら欲しいの？」

早江はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

値札を嫌う男ほど相手を査定する。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。兼好が自分の市場価値を鏡で確認するを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「含み益で評価しておくれやす。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

『徒然草』第38段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

お金は生活を守るが、沈黙まで温めてはくれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

恋愛デューデリジェンス

『徒然草』第109段

「高名の木登りといひし男、人を掙てて、高き木に登せて。」

玲子がいる場所では、空気に独特の張りがある。兼好はそれを『機嫌という気圧配置』と呼んでいた。

早江の会議室。恋愛なのに監査用語が飛び交う。早江は玲子の存在まで調べていた。『会社も男も買う前に監査する』と言われ、兼好は初めて自分が買収案件になった気分を味わう。

この日の最初の出来事は、玲子の存在を指摘されることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「玲子さんは共同出資者ね。」

早江は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

高い木より降り際が危ない。それが、この章の始まりだった。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

旅先では人は少し大胆になる。兼好はもともと大胆なので、旅先ではだいたい余計なことをする。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は共同出資者という言葉に固まる。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「わて、買収案件ですか？」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。二股は隠れ負債と言われるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「二股は隠れ負債。私は引き受けない。」

兼好は返事を探したが、早江の視線の方が一秒早かった。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第109段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『早江から別れてから連絡してと線を引かれる』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「わて、買収案件ですか？」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。出口で兼好が階段を踏み外しかける。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「玲子さんは共同出資者ね。」

冗談で受け流すには、早江の目が少し真面目すぎた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

高い木より降り際が危ないという言葉が、急に冗談ではなくなる。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、玲子の存在を指摘されるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「わて、買収案件ですか？」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第109段。

「高名の木登りといひし男、人を掙てて、高き木に登せて。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、共同出資者という言葉に固まるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。二股は隠れ負債と言われるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「わて、買収案件ですか？」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、早江から別れてから連絡してと線を引かれるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「玲子さんは共同出資者ね。」

早江は、まっすぐ兼好を見た。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

高い木より降り際が危ない。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。出口で兼好が階段を踏み外しかけるを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「監査法人より怖い女や。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

『徒然草』第109段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

逃げ道は婚礼会場へ直結する

『徒然草』第190段

「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。」

人生の分岐点は、もっと荘厳な顔をして現れると思っていた。実際にはスマホの通知だったり、洗濯籠だったりする。

玲子の部屋。ブライダル冊子とスマホ通知。帰宅した兼好を待っていたのはSAE BRIDALの冊子。代表は早江。結婚から逃げるために出会った相手が、結婚式の本丸だった。

この日の最初の出来事は、玲子がブランド社長のフィッシングを楽しみにすることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「来週、ブランドの社長さんが直々にフィッシングしてくれるんやて。」

その瞬間、玲子との距離が一センチだけ変わった気がした。

逃げ道の看板にウェディングベル。それが、この章の始まりだった。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

『徒然草』は七百年も前の本である。ところが兼好が読むと、なぜか今夜の恋愛相談に見えてくる。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は冊子から早江の顔が現れる。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「それは……豪華どすな。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。兼好の手から鍵が落ちるという事実から、彼は三段飛ばして結論へ行く。

「早江って、誰？」

玲子の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第190段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『早江から玲子に会うという通知が来る』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「それは……豪華どすな。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。背後から玲子が『早江って、誰?』と聞く。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「来週、ブランドの社長さんが直々にフィッティングしてくれるんやて。」

玲子の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

逃げ道の看板にウェディングベルという言葉が、急に冗談ではなくなる。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、玲子がブランド社長のフィッティングを楽しみにするの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「それは……豪華どすな。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第190段。

「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、冊子から早江の顔が現れるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。兼好の手から鍵が落ちるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「それは……豪華どすな。」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、早江から玲子に会うという通知が来るの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「来週、ブランドの社長さんが直々にフィッティングしてくれるんやて。」

玲子の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

逃げ道の看板にウェディングベル。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。背後から玲子が『早江って、誰？』と聞くを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「七百年前の法師に相談してもええ？」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

『徒然草』第190段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

徒然草を言い訳に使うな

『徒然草』第190段・第8段

「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。／世の人の心惑はす
事、色欲にはしかず。」

朝の光は、いつも人間を少しだけ正直にする。けれど兼好の場合、正直になる前に言い訳が起きる。

深夜のリビング。玲子と兼好の静かな尋問。兼好は第190段を盾にして自由人を装う。しかし玲子は『七百年前の独身論をマッチングアプリの言い訳に使うな』と一刀両断する。

この日の最初の出来事は、兼好が原文を読み上げることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「徒然草にも、妻は持つまじきものと。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

古典の誤用と、現代の請求書。それが、この章の始まりだった。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

その日、東京は妙に静かだった。静かな日は、兼好の頭の中だけがよく喋る。

兼好は人を見ると、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は玲子が現代語に訳して突き返す。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「その法師、マッチングアプリ使ってへんから。」

その言葉を言った玲子の方が、兼好よりずっと平然としていた。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。早江とのやり取りを一部白状するという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「そこまで史料批判されるとは。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第190段・第8段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れて、残り半分は、たぶん情だった。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『玲子は怒鳴らず珈琲を淹れる』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「その法師、マッチングアプリ使ってへんから。」

玲子はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

逃げ道ばかり探す者は、いつか出口の外で迷子になる。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。静けさの方が怖い
と兼好が悟る。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れ
た。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「徒然草にも、妻は持つまじきものと。」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片
づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

古典の誤用と、現代の請求書という言葉が、急に冗談ではなくなる。
結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分で
はなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、兼好が原文を読み上げるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「その法師、マッチングアプリ使ってへんから。」

玲子はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第190段・第8段。

「妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。／世の人の心惑はす事、色欲にはしかず。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、玲子が現代語に訳して突き返すを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。早江とのやり取りを一部白状するが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「その法師、マッチングアプリ使ってへんから。」

玲子の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

逃げ道ばかり探す者は、いつか出口の外で迷子になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、玲子は怒鳴らず珈琲を淹れるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「徒然草にも、妻は持つまじきものと。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

古典の誤用と、現代の請求書。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。静けさの方が怖いと兼好が悟るを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「史料やなくて、あんたを批判してんの。」

玲子の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

『徒然草』第190段・第8段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

自由を欲しがる男の不自由

『徒然草』第92段

「後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。」

兼好には悪い癖がある。目の前の出来事を、すぐ経営用語か『徒然草』で説明したがることだ。

東京駅。行き先表示を見ながら兼好は逃げる。玲子にも早江にも見透かされた兼好は、仕事の誘いを口実に上海へ向かう。第二の矢を持ったつもりが、どの矢も自分に刺さっている。

この日の最初の出来事は、スーツケースに徒然草を詰めることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「逃げるのね。」

早江はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

自由の搭乗券と戻る場所。それが、この章の始まりだった。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

玲子がいる場所では、空気に独特の張りがある。兼好はそれを『機嫌という気圧配置』と呼んでいた。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は玲子が見送りに来ない。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「戦略的撤退です。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。早江から『逃げるのね』と一言届くという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「逃げる人は、戻る場所だけ忘れんといて。」

その瞬間、玲子との距離が一センチだけ変わった気がした。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第92段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『兼好が出国を国際分散と呼ぶ』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「戦略的撤退です。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

逃げ道ばかり探す者は、いつか出口の外で迷子になる。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。機内で自分だけ納得する。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「逃げるのね。」

早江の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

自由の搭乗券と戻る場所という言葉が、急に冗談ではなくなる。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、スーツケースに徒然草を詰めるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「戦略的撤退です。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第92段。

「後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、玲子が見送りに来ないを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。早江から『逃げるのね』と言届くが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「戦略的撤退です。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

逃げ道ばかり探す者は、いつか出口の外で迷子になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、兼好が出国を国際分散と呼ぶの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「逃げるのね。」

その言葉を言った早江の方が、兼好よりずっと平然としていた。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

自由の搭乗券と戻る場所。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。機内で自分だけ納得するを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「その一言がいちばん重いんです。」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

『徒然草』第92段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えたただけだ。

自由は扉が開いている状態ではない。戻る場所を自分で選べる状態なのかもしれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

上海、最上階

『徒然草』第10段

「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ。」

男の自信というものは、根拠が薄いほど音が大きい。兼好の脳内ヒモコンは今日も起動音だけは立派だった。

上海の高層レジデンス。最上階、夜景、黒いカード。上海で兼好は富裕層の女性から部屋の鍵、黒いカード、生活費を提示される。ヒモとしては歴史的勝利。しかし机には愛より先に契約書が置かれていた。

この日の最初の出来事は、鍵を手渡されることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「家も、カードも、生活費も出すわ。」

女性は、まっすぐ兼好を見た。

理想の家と長すぎる利用規約。それが、この章の始まりだった。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

人生の分岐点は、もっと荘厳な顔をして現れると思っていた。実際にはスマホの通知だったり、洗濯籠だったりする。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は黒いカードに目が輝く。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「ついに……勝った。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。生活費の条件を確認するという事実から、彼は三段飛ばして結論へ行く。

「では条件を確認しましょう。」

女性は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第10段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『分厚い契約書が現れる』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「ついに……勝った。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。兼好が勝利宣言を小声で撤回する。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「家も、カードも、生活費も出すわ。」

女性は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

理想の家と長すぎる利用規約という言葉が、急に冗談ではなくなる。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、鍵を手渡されるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「ついに……勝った。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第10段。

「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、黒いカードに目が輝くを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。生活費の条件を確認するが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「ついに……勝った。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、分厚い契約書が現れるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「家も、カードも、生活費も出すわ。」

冗談で受け流すには、女性の目が少し真面目すぎた。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

理想の家と長すぎる利用規約。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。兼好が勝利宣言を小声で撤回するを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「恋に利用規約が付いてますのん？」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

『徒然草』第10段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

恋人に KPI、あるん？

『徒然草』第38段

「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ。」

女は沈黙し、男は喋りすぎる。少なくとも、兼好と玲子のあいだではそれがひとつの自然法則だった。

翌朝のダイニング。朝食七時、同伴月六回、笑顔常時。新生活の初日に渡されたのは業務説明。朝食時間、同伴回数、笑顔の頻度まで数値化され、兼好は恋愛が管理会計へ変わる瞬間を目撃する。

この日の最初の出来事は、朝食時刻を指定されることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「恋人に KPI、あるん？」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

愛情のダッシュボード。それが、この章の始まりだった。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

朝の光は、いつも人間を少しだけ正直にする。けれど兼好の場合、正直になる前に言い訳が起きる。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は同伴月六回をカレンダーに入れられる。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「改善できないものは管理できないわ。」

兼好は返事を探したが、女性の視線の方が一秒早かった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。笑顔の頻度を指摘されるという事実から、彼は三段飛ばして結論へ行く。

「抱擁も可視化しはる？」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第38段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『兼好が KPI 表を Excel 目線で読む』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「改善できないものは管理できないわ。」

女性は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。自分の研究者魂が嫌な方向に目覚める。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「恋人に KPI、あるん？」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

愛情のダッシュボードという言葉が、急に冗談ではなくなる。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、朝食時刻を指定されるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「改善できないものは管理できないわ。」

女性は何をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第38段。

「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、同伴月六回をカレンダーに入れられるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。笑顔の頻度を指摘されるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「改善できないものは管理できないわ。」

女性は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、兼好が KPI 表を Excel 目線で読むの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「恋人に KPI、あるん？」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

愛情のダッシュボード。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。自分の研究者魂が嫌な方向に目覚めるを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「もちろん。満足度調査もあるわ。」

女性は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

『徒然草』第38段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

抱擁、八十二点

『徒然草』第38段・第8段

「名利に使はれて／色欲にはしかず。」

人は大事件の前に、案外どうでもいいことをしている。兼好も同じで、まず珈琲の温度を測っていた。

月末査定。兼好の好感度は82点。花、お茶、会話、抱擁まで採点される。兼好は数字に強いはずなのに、自分の感情を採点されると途端に弱い。

この日の最初の出来事は、好感度82点を告げられることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「今月は82点。」

女性は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

採点される抱擁。それが、この章の始まりだった。

『まあ、何とかなる』は兼好の得意な言葉だ。何とかしたのが自分ではなく玲子だった日も多いが、その集計は本人の資料には載っていない。

兼好には悪い癖がある。目の前の出来事を、すぐ経営用語か『徒然草』で説明したがることだ。

兼好は人を見ると、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は未達分は翌月精算と言われる。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「抱擁まで評価対象ですか。」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。花の選び方を減点されるという事実から、彼は三段飛ばして結論へ行く。

「改善余地があるということよ。」

女性は、まっすぐ兼好を見た。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第38段・第8段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『抱擁の長さまで指摘される』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「抱擁まで評価対象ですか。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。兼好が自分の感情を不良在庫と呼ぶ。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「今月は82点。」

女性は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

採点される抱擁という言葉が、急に冗談ではなくなる。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、好感度82点を告げられるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「抱擁まで評価対象ですか。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第38段・第8段。

「名利に使はれて／色欲にはしかず。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、未達分は翌月精算と言われるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。花の選び方を減点されるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「抱擁まで評価対象ですか。」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、抱擁の長さまで指摘されるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「今月は82点。」

兼好は返事を探したが、女性の視線の方が一秒早かった。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

採点される抱擁。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。兼好が自分の感情を不良在庫と呼ぶを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「恋は期末決算したらあかん。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

『徒然草』第38段・第8段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

豪華な食卓、会話ゼロ

『徒然草』第75段

「つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。」

旅先では人は少し大胆になる。兼好はもともと大胆なので、旅先ではだいたい余計なことをする。

豪華な長い食卓。料理は一流、会話はゼロ。食費も住居も満たされたのに、兼好の心は空腹になる。玲子との雑な朝食が、やけに懐かしくなる。

この日の最初の出来事は、高級料理が並ぶことだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「今日、何かありました？」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

満腹と空腹が同時に来る夜。それが、この章の始まりだった。

旅先の夜景は、人生まで高級に見せる。翌朝、歯ブラシと請求書が並ぶと、だいたい元の人生に戻る。兼好はその落差を何度も味わった。

男の自信というものは、根拠が薄いほど音が大きい。兼好の脳内ヒモコンは今日も起動音だけは立派だった。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は端と端で黙って食べる。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「食事中は静かに。」

女性は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。兼好が玲子の厚焼き卵を思い出すという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「静けさにも限度いうもんが。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第75段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『スマホを触ることも禁止される』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「食事中は静かに。」

冗談で受け流すには、女性の目が少し真面目すぎた。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。食わせてもらっても心は飢えると気づく。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「今日、何かありました？」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

満腹と空腹が同時に来る夜という言葉が、急に冗談ではなくなる。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、高級料理が並ぶの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「食事中は静かに。」

冗談で受け流すには、女性の目が少し真面目すぎた。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第75段。

「つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、端と端で黙って食べるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。兼好が玲子の厚焼き卵を思い出すが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「食事中は静かに。」

女性は、まっすぐ兼好を見た。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、スマホを触ることも禁止されるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「今日、何かありました？」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

満腹と空腹が同時に来る夜。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。食わせてもらっても心は飢えると気づくを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「玲子はんの小言、BGMとして優秀やったんやな。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

『徒然草』第75段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

兼好は満腹と空腹が同時に来る夜を頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

わし、ヒモやない。業務委託や

『徒然草』第155段

「世に従はん人は、先づ機嫌を知るべし。」

『徒然草』は七百年も前の本である。ところが兼好が読むと、なぜか今夜の恋愛相談に見えてくる。

鏡の前。兼好が自分の契約上の身分を見直す。兼好は悟る。自分は養われているのではない。相手が『恋愛』を外部発注し、自分はサービス提供者になっている。

この日の最初の出来事は、契約書を読み直すことだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「わし、ヒモやない。業務委託や。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

恋愛の外注契約。それが、この章の始まりだった。

必要とされることと、養われることは似ているようで違う。前者には自分の足が要る。兼好は遅れてその違いを覚えた。

女は沈黙し、男は喋りすぎる。少なくとも、兼好と玲子のあいだではそれがひとつの自然法則だった。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は成果物という言葉を見つける。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「彼女は恋愛を発注してただけや。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。鏡に向かって業務委託宣言という事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「契約更新は成果次第よ。」

女性は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第155段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『更新条件に青ざめる』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「彼女は恋愛を発注してただけや。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。玲子の既読のつかない画面を見る。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「わし、ヒモやない。業務委託や。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

恋愛の外注契約という言葉が、急に冗談ではなくなる。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、契約書を読み直すの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「彼女は恋愛を発注してただけや。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第155段。

「世に従はん人は、先づ機嫌を知るべし。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、成果物という言葉を見つけるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。鏡に向かって業務委託宣言が思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「彼女は恋愛を発注してただけや。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、更新条件に青ざめるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「わし、ヒモやない。業務委託や。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

恋愛の外注契約。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

兼好は恋愛の外注契約を頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。玲子の既読のつかない画面を見るを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「愛情に検収印、押さんといて。」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

『徒然草』第155段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

撤収は敗北やない。分散投資どす

『徒然草』第155段

「世に従はん人は、先づ機嫌を知るべし。」

その日、東京は妙に静かだった。静かな日は、兼好の頭の中だけがよく喋る。

上海の空港。出発案内にバンコクの文字。兼好は中国でのヒモ修業を終える。勝てない市場から離れるのは敗北ではない、と企業戦略の言葉で自分を慰め、東南アジアへ向かう。

この日の最初の出来事は、契約解除に署名することだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「撤収は敗北やない。分散投資どす。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

潮時を読む出国ゲート。それが、この章の始まりだった。

人は『帰る』と決めた瞬間から、風景の見え方が変わる。行き先のない自由より、一つの玄関の方が急に大きく見える。

人は大事件の前に、案外どうでもいいことをしている。兼好も同じで、まず珈琲の温度を測っていた。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は黒いカードを返す。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「最後まで言葉だけは上手ね。」

女性は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

能力というものは、使わないふりをして消えてはくれない。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。企業ニュースでASEANを調べるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「機嫌と潮時は、外したらあきまへん。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第155段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『撤収を分散投資と名付ける』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「最後まで言葉だけは上手ね。」

兼好は返事を探したが、女性の視線の方が一秒早かった。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

働きたくない男が、必要とされた瞬間だけ背筋を伸ばす。それも人間の妙である。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。バンコク便の搭乗口へ歩く。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「撤収は敗北やない。分散投資どす。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

潮時を読む出国ゲートという言葉が、急に冗談ではなくなる。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、契約解除に署名するの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「最後まで言葉だけは上手ね。」

兼好は返事を探したが、女性の視線の方が一秒早かった。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

能力というのは、使わないふりをして消えてはくれない。

恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第155段。

「世に従はん人は、先づ機嫌を知るべし。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、黒いカードを返すを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。企業ニュースでASEANを調べるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「最後まで言葉だけは上手ね。」

女性は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

働きたくない男が、必要とされた瞬間だけ背筋を伸ばす。それも人間の妙である。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

兼好は潮時を読む出国ゲートを頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、撤収を分散投資と名付けるの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「撤収は敗北やない。分散投資どす。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

潮時を読む出国ゲート。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。バンコク便の搭乗口へ歩くを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「ヒモにも China+1 どす。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

『徒然草』第155段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

能力というのは、使わないふりをして消えてはくれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

バンコクの朝、ヒモコン再起動

『徒然草』第155段

「先づ機嫌を知るべし。」

玲子がいる場所では、空気に独特の張りがある。兼好はそれを『機嫌という気圧配置』と呼んでいた。

バンコクの高層ホテル。湿った朝の光。中国で夢破れた兼好は微笑みの国で再起動する。笑顔をすぐ好意と誤認する癖も、一緒に再起動する。

この日の最初の出来事は、ホテルの窓から街を見ることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「中国はあきまへんでした。せやけど、ここには微笑みがありますえ。」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

微笑みを恋に変換する誤作動。それが、この章の始まりだった。

恋の名場面は、たいてい後から決まる。その場ではただ気まずかった一言が、数年後には宝物になることがある。

旅先では人は少し大胆になる。兼好はもともと大胆なので、旅先ではだいたい余計なことをする。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は脳内ヒモコンを再起動する。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「Good morning, Kenko.」

ナリンはカップを置き、結論だけを机の上に残した。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。朝食会場でナリンと出会うという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「これは完全に脈ありです。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第155段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『一度の笑顔で脈あり判定する』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「Good morning, Kenko.」

ナリンの言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。徒然草を都合よく閉じる。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「中国はあきまへんでした。せやけど、ここには微笑みがありますえ。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

微笑みを恋に変換する誤作動という言葉が、急に冗談ではなくなる。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、ホテルの窓から街を見るの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「Good morning, Kenko.」

ナリンの言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第155段。

「先づ機嫌を知るべし。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、脳内ヒモコンを再起動するを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

兼好は微笑みを恋に変換する誤作動を頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。朝食会場でナリンと出会うが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「Good morning, Kenko.」

その言葉を言ったナリンの方が、兼好よりずっと平然としていた。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、一度の笑顔で脈あり判定するの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「中国はあきまへんでした。せやけど、ここには微笑みがありますえ。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

微笑みを恋に変換する誤作動。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。徒然草を都合よく閉じるを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「まだ挨拶しかしていない。」

語りの声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

『徒然草』第155段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

善意は恋にあらず

『徒然草』第 117 段

「友とするにわろき者、七つあり。よき友三つあり。」

人生の分岐点は、もっと荘厳な顔をして現れると思っていた。実際にはスマホの通知だったり、洗濯籠だったりする。

ナリンとの朝食。親切と余裕に満ちた時間。タイ人女性社長ナリンは親切で知的で、食事をご馳走する。兼好は勝利を確信するが、善意はまだ恋ではない。

この日の最初の出来事は、ナリンが食事を勧めることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「食べて。おすすめです。」

ナリンの言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

善意の先に勝手に婚姻届を置く男。それが、この章の始まりだった。

兼好は今日も結論を保留した。保留できるのは、明日も話せる相手がいるからだ。その贅沢に気づくまで、ずいぶん遠回りした。

『徒然草』は七百年も前の本である。ところが兼好が読むと、なぜか今夜の恋愛相談に見えてくる。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は兼好が資産背景を想像する。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「ここまで親切やと、もう家族どすな。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。親切を恋と読み替えるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「Why family?」

ナリンの一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第117段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『ナリンは仕事の話をする』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「ここまで親切やと、もう家族どすな。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。兼好だけがデートの議事録を作る。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「食べて。おすすめです。」

その言葉を言ったナリンの方が、兼好よりずっと平然としていた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

善意の先に勝手に婚姻届を置く男という言葉が、急に冗談ではなくなる。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、ナリンが食事を勧めるの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「ここまで親切やと、もう家族どすな。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

兼好は善意の先に勝手に婚姻届を置く男を頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第117段。

「友とするにわろき者、七つあり。よき友三つあり。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、兼好が資産背景を想像するを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。親切を恋と読み替えるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「ここまで親切やと、もう家族どすな。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、ナリンは仕事の話をするの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「食べて。おすすめです。」

ナリンはカップを置き、結論だけを机の上に残した。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

善意の先に勝手に婚姻届を置く男。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていなかった。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。兼好だけがデートの議事録を作るを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「そこ、まだ精査中です。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

『徒然草』第117段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

Split Bill

『徒然草』第 117 段

「よき友三つあり。一つには、物くるる友。」

朝の光は、いつも人間を少しだけ正直にする。けれど兼好の場合、正直になる前に言い訳が起きる。

夜のレストラン。スマホ画面に二文字の現実。ロマンの向こうから会計が来る。ナリンが笑顔で見せた画面には Split Bill。家賃も食費も小遣いも、当然ながら全部なし。

この日の最初の出来事は、食後に兼好が余裕の表情を作ることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「Split Bill.」

ナリンは説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

割り勘という現代の無常。それが、この章の始まりだった。

洗濯物は風に任せれば乾くが、人間関係はそうはいかない。放っておけば乾くどころか、妙な皺が残る。兼好は皺を伸ばすのが少しだけ上手くなった。

その日、東京は妙に静かだった。静かな日は、兼好の頭の中だけがよく喋る。

兼好は人を見ると、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日はナリンが送金画面を開く。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「……恋より先に会計が来ましたな。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。Split Bill の文字が光るという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「Of course.」

兼好は返事を探したが、ナリンの視線の方が一秒早かった。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第117段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『兼好の財布に風が吹く』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「……恋より先に会計が来ましたな。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。物をくれる友の段を思い出して恥ずかしくなる。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「Split Bill.」

冗談で受け流すには、ナリンの目が少し真面目すぎた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

割り勘という現代の無常という言葉が、急に冗談ではなくなる。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

兼好は割り勘という現代の無常を頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、食後に兼好が余裕の表情を作るの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「……恋より先に会計が来ましたな。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第117段。

「よき友三つあり。一つには、物くるる友。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、ナリンが送金画面を開くを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。Split Bill の文字が光るが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「……恋より先に会計が来ましたな。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、兼好の財布に風が吹くの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「Split Bill.」

ナリンは、まっすぐ兼好を見た。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

割り勘という現代の無常。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。物をくれる友の段を思い出して恥ずかしくなるを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「財布の底に悟りあり。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

『徒然草』第117段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

何ができますか？

『徒然草』第 117 段

「よき友とは、自分に何をくれる者かだけではない。」

兼好には悪い癖がある。目の前の出来事を、すぐ経営用語か『徒然草』で説明したがることだ。

ナリンのオフィス。恋愛だと思った場所が面接室。ナリンは笑顔のまま『あなたは何ができますか』と問う。兼好は初めて、養われる前に職務経歴を求められる。

この日の最初の出来事は、家賃・食費・小遣いがないと確認することだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「Kenko、あなたは何ができますか？」

その瞬間、ナリンとの距離が一センチだけ変わった気がした。

養われる前に始まる面接。それが、この章の始まりだった。

『徒然草』を閉じると、部屋の音が戻った。冷蔵庫、エアコン、遠くの車。哲学のあとに生活音がある。その順番が兼好には心地よかった。

玲子がいる場所では、空気に独特の張りがある。兼好はそれを『機嫌という気圧配置』と呼んでいた。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日はナリンが能力を質問する。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「……話を聞けます。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。兼好が一度固まるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「Business skill?」

ナリンの言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第117段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力『京大院・研究者の経歴を思い出す』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「……話を聞けます。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

兼好は養われる前に始まる面接を頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。ヒモにも職務経歴書が必要と悟る。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「Kenko、あなたは何ができますか？」

ナリンの一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

養われる前に始まる面接という言葉が、急に冗談ではなくなる。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、家賃・食費・小遣いがないと確認するの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「……話を聞けます。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第 117 段。

「よき友とは、自分に何をくれる者かだけではない。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、ナリンが能力を質問するを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていなかった。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。兼好が一度固まるが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「……話を聞けます。」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、京大院・研究者の経歴を思い出すの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「Kenko、あなたは何ができますか？」

ナリンの声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

養われる前に始まる面接。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。ヒモにも職務経歴書が必要と悟るを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「京大院卒を、今ここで使う日が来ましたか。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

『徒然草』第117段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えたただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

元研究者の片鱗

『徒然草』第 92 段

「二つの矢を持つことなかれ。」

男の自信というものは、根柢が薄いほど音が大きい。兼好の脳内ヒモコンは今日も起動音だけは立派だった。

会議室。数字と組織図を前に兼好だけ劇画になる。ふざけてばかりの兼好が、企業の数字を読むと突然本気になる。人間関係の歪みが利益率に出ていると指摘し、ナリンの目が変わる。

この日の最初の出来事は、売上推移を見ることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「企業いうんは、人の感情で壊れます。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

能力は逃げても追ってくる。それが、この章の始まりだった。

正しいことを言う人より、間違えたあとに戻ってこられる人の方が、長く一緒にいられるのかもしれない。兼好はもちろん、間違える方だけは得意だった。

人生の分岐点は、もっと荘厳な顔をして現れると思っていた。実際にはスマホの通知だったり、洗濯籠だったりする。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は離職率に気づく。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「Continue.」

その言葉を言ったナリンの方が、兼好よりずっと平然としていた。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

能力というものは、使わないふりをして消えてはくれない。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。会議の空気を読むという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「数字は、人が黙ったあとに喋ります。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第92段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

兼好は能力は逃げても追ってくるを頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『組織の感情を数字で説明する』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「Continue.」

ナリンはカップを置き、結論だけを机の上に残した。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

働きたくない男が、必要とされた瞬間だけ背筋を伸ばす。それも人間の妙である。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。ナリンが戦略顧問の名刺を差し出す。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「企業いうんは、人の感情で壊れます。」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

能力は逃げても追ってくるという言葉が、急に冗談ではなくなる。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、売上推移を見るの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「Continue.」

ナリンはカップを置き、結論だけを机の上に残した。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

能力というのは、使わないふりをして消えてはくれない。

兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第92段。

「二つの矢を持つことなかれ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、離職率に気づくを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。会議の空気を読むが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「Continue.」

ナリンの言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越えていた。

働きたくない男が、必要とされた瞬間だけ背筋を伸ばす。それも人間の妙である。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、組織の感情を数字で説明するの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「企業いうんは、人の感情で壊れます。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

能力は逃げても追ってくる。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。ナリンが戦略顧問の名刺を差し出すを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「You work with us.」

ナリンの一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

『徒然草』第92段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

能力というものは、使わないふりをしても消えてはくれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

恋のつもりが採用通知

『徒然草』第 117 段

「よき友三つあり。」

女は沈黙し、男は喋りすぎる。少なくとも、兼好と玲子のあいだではそれがひとつの自然法則だった。

ナリンの執務室。差し出されたのは部屋の鍵ではなく名刺。兼好はとうとう『鍵が来る』と確信する。しかしナリンが渡したのは戦略顧問の名刺。養われにきた男が働くことになる。

この日の最初の出来事は、兼好が差し出された物を鍵だと思うことだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「これは部屋の鍵、来ますな。」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

ヒモからパートナーへの強制アップデート。それが、この章の始まりだった。

その日の損益を計算すれば赤字だった。それでも兼好は、なぜか悪い一日だと思わなかった。心の帳簿には、数字のない欄がある。

朝の光は、いつも人間を少しだけ正直にする。けれど兼好の場合、正直になる前に言い訳が起きる。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は名刺の肩書きを二度読む。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「No. Business card.」

冗談で受け流すには、ナリンの目が少し真面目すぎた。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

能力というものは、使わないふりをしても消えてはくれない。

兼好はヒモからパートナーへの強制アップデートを頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。ナリンと一緒に稼げる男を評価するという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「養う男はいらない。一緒に稼げる男なら欲しい。」

その瞬間、ナリンとの距離が一センチだけ変わった気がした。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第117段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

兼好の頭の中には、本人が『ヒモコン』と呼ぶ架空の計算機がある。家賃、食費、機嫌、自由時間、愛情、逃亡可能性。それらを勝手に点数化する、世界でただ一台の役に立たない装置だ。

本日の入力は『翌朝から会議に出る』。表示された答えは、もちろん彼に都合がよかった。

「No. Business card.」

ナリンは、まっすぐ兼好を見た。

ところが数式に入らないものがある。沈黙、匂い、触れた手の冷たさ、誰かに『帰ってきて』と言われた記憶。兼好は、それらをいつも『算定不能』に入れていた。

働きたくない男が、必要とされた瞬間だけ背筋を伸ばす。それも人間の妙である。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。兼好が働いている自分に抗議する。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「これは部屋の鍵、来ますな。」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

ヒモからパートナーへの強制アップデートという言葉が、急に冗談ではなくなる。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、兼好が差し出された物を鍵だと思ふの余韻がまだ部屋に残っている瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「No. Business card.」

ナリンは、まっすぐ兼好を見た。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

能力というものは、使わないふりをして消えてはくれない。

その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第117段。

「よき友三つあり。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、名刺の肩書きを二度読むを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。ナリンが一緒に稼げる男を評価するが思わぬ形で自分へ返ってくる。今回も例外ではなかった。

「No. Business card.」

ナリンは説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

働きたくない男が、必要とされた瞬間だけ背筋を伸ばす。それも人間の妙である。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、翌朝から会議に出るの後始末をする羽目になることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「これは部屋の鍵、来ますな。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

ヒモからパートナーへの強制アップデート。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。兼好が働いている自分に抗議するを抱えたまま次の場所へ進む。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「なんでわて、バンコクまで来て働いてますのん？」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

『徒然草』第117段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

能力というのは、使わないふりをして消えてはくれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

玲子から着信

『徒然草』第 109 段

「過ちすな。心して降りよ。」

人は大事件の前に、案外どうでもいいことをしている。兼好も同じで、まず珈琲の温度を測っていた。

バンコクの夜。スマホに玲子の名前。仕事で手応えを得た矢先、玲子から『バンコク、楽しそうやねえ』と着信。高い木に登るより、降り際が怖い。

この日の最初の出来事は、会議後にナリンと乾杯することだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「バンコク、楽しそうやねえ。」

玲子は、まっすぐ兼好を見た。

高い木から降りる電話。それが、この章の始まりだった。

兼好は高い木から降りる電話を頭の隅に置き、窓の外を見た。街は他人の恋愛など知らない顔で動いている。その無関心さに、少し救われる夜もある。

兼好には悪い癖がある。目の前の出来事を、すぐ経営用語か『徒然草』で説明したがることだ。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は玲子の着信で血の気が引く。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「仕事どす。完全に仕事どす。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

能力というものは、使わないふりをしていても消えてはくれない。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。楽しそうだと静かに言われるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「誰も聞いてへんことまで喋ってるな。」

玲子は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第109段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。兼好が事情を説明しすぎる。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「人は降り際に一番よう喋るんどす。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

高い木から降りる電話という言葉が、急に冗談ではなくなる。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、帰国便を検索する瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「バンコク、楽しそうやねぇ。」

玲子は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

能力というものは、使わないふりをしても消えてはくれない。

兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第109段。

「過ちすな。心して降りよ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、会議後にナリンと乾杯するの余韻がまだ部屋に残っている。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。玲子の着信で血の気が引くを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。今回も例外ではなかった。

「バンコク、楽しそうやねえ。」

冗談で受け流すには、玲子の目が少し真面目すぎた。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

働きたくない男が、必要とされた瞬間だけ背筋を伸ばす。それも人間の妙である。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、楽しそうだと静かに言われるが思わぬ形で自分へ返ってくることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「人は降り際に一番よう喋るんどす。」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

高い木から降りる電話。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。結論は出なかった。兼好の人生で、結論が早く出たことの方が少ない。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。兼好が事情を説明しすぎるの後始末をする羽目になる。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「誰も聞いてへんことまで喋ってるな。」

玲子は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

『徒然草』第109段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

能力というものは、使わないふりをして消えてはくれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

帰国便と未練の重量制限

『徒然草』第 155 段

「足を踏みとどむまじきなり。」

旅先では人は少し大胆になる。兼好はもともと大胆なので、旅先ではだいたい余計なことをする。

スワンナプーム空港。名刺と徒然草を鞆に入れる。ナリンの会社で必要とされる喜びと、玲子のいる東京へ戻りたい気持ち。その両方を抱え、兼好は初めて『逃げる』のではなく『帰る』ために空港へ向かう。

この日の最初の出来事は、ナリンに帰国を告げることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「You will come back?」

ナリンの声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

帰るための搭乗券。それが、この章の始まりだった。

研究者だった頃、兼好は再現性を大切にした。恋愛では、同じ失敗だけが異様な再現性で繰り返される。『データとして強すぎますな』と、ひとりで苦笑した。

男の自信というものは、根拠が薄いほど音が大きい。兼好の脳内ヒモコンは今日も起動音だけは立派だった。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は戦略顧問はオンライン継続になる。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「仕事では。人生は……東京に置いてきました。」

兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。土産を選びすぎて荷物が重くなるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「Then go home.」

ナリンはカップを置き、結論だけを机の上に残した。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第 155 段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。玲子への土産だけ決められない。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「帰る、という言葉は逃げるより難しいんだすな。」

冗談で受け流すには、兼好の目が少し真面目すぎた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

帰るための搭乗券という言葉が、急に冗談ではなくなる。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、搭乗口で自分の動機を認める瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「You will come back?」

その瞬間、ナリンとの距離が一センチだけ変わった気がした。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第 155 段。

「足を踏みとどむまじきなり。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、ナリンに帰国を告げるの余韻がまだ部屋に残っている。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。戦略顧問はオンライン継続になるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。今回も例外ではなかった。

「You will come back?」

ナリンの一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、土産を選びすぎて荷物が重くなるが思わぬ形で自分へ返ってくることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「帰る、という言葉は逃げるより難しいんだすな。」

兼好は、まっすぐ兼好を見た。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

帰るための搭乗券。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。明日になれば、また別の問題が起きる。それでよいのだと、兼好は少しだけ思えるようになっていた。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。玲子への土産だけ決められないの後始末をする羽目になる。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「Then go home.」

その言葉を言ったナリンの方が、兼好よりずっと平然としていた。

『徒然草』第155段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

逆ナンされても、帰る男

『徒然草』第 92 段・第 8 段

「二つの矢を持つことなかれ。／色欲にはしかず。」

『徒然草』は七百年も前の本である。ところが兼好が読むと、なぜか今夜の恋愛相談に見えてくる。

帰国後の東京。街で声を掛けられる兼好。少し仕事のできる男になって帰ってきた兼好は、以前より妙に女性の視線を集める。だが第二の矢を持つ癖をやめられるかが試される。

この日の最初の出来事は、駅前で女性に声を掛けられることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「お茶しません？」

女性は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

誘惑と買い物袋。それが、この章の始まりだった。

玲子なら何と言うだろう、と考えた時点で答えの半分は出ている。どこへ行っても頭の中に残る声は、通知を切っても消えない。

女は沈黙し、男は喋りすぎる。少なくとも、兼好と玲子のあいだではそれがひとつの自然法則だった。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は脳内ヒモコンが自動起動する。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「昔のわてなら即、経営分析してました。」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

能力というのは、使わないふりをして消えてはくれない。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。玲子から買い物メッセージが来るという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「牛乳と卵、お願い。」

玲子・LINE は、まっすぐ兼好を見た。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第92段・第8段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。兼好が一度だけ振り返る。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「第二の矢より、卵を割らんことが先どす。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

誘惑と買い物袋という言葉が、急に冗談ではなくなる。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、結局スーパーの袋を持って帰る瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「お茶しません？」

女性は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

能力というものは、使わないふりをして消えてはくれない。

玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第92段・第8段。

「二つの矢を持つことなかれ。／色欲にはしかず。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、駅前で女性に声を掛けられるの余韻がまだ部屋に残っている。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。脳内ヒモコンが自動起動するを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。今回も例外ではなかった。

「お茶しません？」

兼好は返事を探したが、女性の視線の方が一秒早かった。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

働きたくない男が、必要とされた瞬間だけ背筋を伸ばす。それも人間の妙である。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、玲子から買い物メッセージが来るが思わぬ形で自分へ返ってくることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「第二の矢より、卵を割らんことが先どす。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

誘惑と買い物袋。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。そして兼好は、また一つ賢くなった。正確には、賢くなった気がした。そこが問題だった。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。兼好が一度だけ振り返るの後始末をする羽目になる。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「牛乳と卵、お願い。」

冗談で受け流すには、玲子・LINEの目が少し真面目すぎた。

『徒然草』第92段・第8段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えたただけだ。

能力というものは、使わないふりをして消えてはくれない。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

花は盛りに、女は若さにあらず

『徒然草』第 137 段

「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。」

その日、東京は妙に静かだった。静かな日は、兼好の頭の中だけがよく喋る。

東京の朝。玲子は鏡の前、兼好は珈琲を淹れる。再会した玲子を見て、兼好は以前より美しいと言う。玲子は老けたの間違いだと返す。兼好は『熟成』と言って新聞で叩かれるが、本音は別にある。

この日の最初の出来事は、朝の珈琲を淹れることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「玲子はん、前より綺麗にならあったな。」

その言葉を言った兼好の方が、兼好よりずっと平然としていた。

満開ではない花の美しさ。それが、この章の始まりだった。

七百年前の本に、既読スルーも Split Bill も婚活アプリも載っていない。それでも人が勝手に期待し、勝手に傷つく仕組みだけは、驚くほど変わっていないかった。

人は大事件の前に、案外どうでもいいことをしている。兼好も同じで、まず珈琲の温度を測っていた。

兼好は人を見ると、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は玲子の疲れた横顔を見る。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「老けた、の間違いでしょう。」

玲子は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。きれいになったと言うという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「いや、熟成どす。」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第137段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。熟成発言で新聞が飛ぶ。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「一緒に生きた時間だけは、若い人には絶対つくれへんのどす。」
兼好は返事を探したが、兼好の視線の方が一秒早かった。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

満開ではない花の美しさという言葉が、急に冗談ではなくなる。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、一緒に生きた時間は若い人に作れないと告げる瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「玲子はん、前より綺麗にならったな。」

兼好はカップを置き、結論だけを机の上に残した。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第137段。

「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、朝の珈琲を淹れるの余韻がまだ部屋に残っている。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。玲子の疲れた横顔を見るを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。今回も例外ではなかった。

「玲子はん、前より綺麗にならったな。」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

好意を資産に換算し始めた瞬間、心はたいてい簿外債務になる。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、きれいになったと言うが思わぬ形で自分へ返ってくることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「一緒に生きた時間だけは、若い人には絶対つくれへんのどす。」

兼好は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

満開ではない花の美しさ。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。古典は答えをくれない。ただ、逃げ道を塞ぐような問いを、何百年も残している。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。熟成発言で新聞が飛ぶの後始末をする羽目になる。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「いや、熟成どす。」

兼好の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

『徒然草』第137段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

恋は所有権ではなく、相手の不完全さに手を伸ばせるかどうかで試される。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

四文字の魔法 - おかえり

『徒然草』第 137 段・第 75 段

「花は盛りに／つれづれわぶる人は。」

玲子がいる場所では、空気に独特の張りがある。兼好はそれを『機嫌という気圧配置』と呼んでいた。

夕暮れの玄関。玲子が靴を履きながら振り返る。玲子が『今夜、ご飯いる?』と聞く。兼好は『おります』『何が?』『ここに』と答え、玲子は静かに『おかえり』と言う。

この日の最初の出来事は、玲子が出勤前に夕飯を聞くことだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「今夜、ご飯いる?」

冗談で受け流すには、玲子の目が少し真面目すぎた。

帰る場所を決める四文字。それが、この章の始まりだった。

兼好は自分の理屈を一度、珈琲と一緒に飲み込んだ。苦みが残る。うまい理屈ほど、飲み込むと胃に重い。

旅先では人は少し大胆になる。兼好はもともと大胆なので、旅先ではだいたい余計なことをする。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日は兼好が主語を取り違える。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「おります。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。短い沈黙が落ちるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「何が？」

玲子は肩をすくめた。兼好の理屈は、そこで一度失速した。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第137段・第75段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。玲子がおかえりと言う。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「ここに。」

兼好の言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

帰る場所を決める四文字という言葉が、急に冗談ではなくなる。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、扉が閉じてから兼好が胸を押さえる瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「……おかえり。」

玲子は、まっすぐ兼好を見た。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

兼好は胸の中でメモした。今日の損失、少々。今日の学び、たぶん大きい。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第137段・第75段。

「花は盛りに／つれづれわぶる人は。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、玲子が出勤前に夕飯を聞くの余韻がまだ部屋に残っている。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。兼好が主語を取り違えるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。今回も例外ではなかった。

「ここに。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、短い沈黙が落ちるが思わぬ形で自分へ返ってくることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「何が？」

その言葉を言った玲子の方が、兼好よりずっと平然としていた。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

帰る場所を決める四文字。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。兼好は笑った。笑うしかないときの笑顔は、たいてい人生でいちばん正直だ。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。玲子がおかえりと言うの後始末をする羽目になる。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「今夜、ご飯いる？」

兼好は返事を探したが、玲子の視線の方が一秒早かった。

『徒然草』第137段・第75段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。玲子はため息をついた。そのため息の半分は呆れで、残り半分は、たぶん情だった。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

徒然草には、そこまで書いてへん

『徒然草』第 137 段・第 117 段・第 155 段・第 190 段

「花は盛りに。よき友三つあり。先づ機嫌を知るべし。妻といふものこそ。」

人生の分岐点は、もっと荘厳な顔をして現れると思っていた。実際にはスマホの通知だったり、洗濯籠だったりする。

東京の夜。ベランダの洗濯物と珈琲、二人の生活。感傷に浸る兼好へ玲子から『洗濯物、干しておいて』。帰る場所には労働も付いてくる。それでも兼好は、養われることより、一緒に暮らすことの方がずっと難しく、ずっと面白いと知る。

この日の最初の出来事は、LINE で洗濯指令が来ることだった。兼好はそれを大したことではないと思ったが、彼の人生では『大したことではない』出来事ほど、後から大きな請求書になって戻ってくる。

「洗濯物、干しておいて。」

玲子・LINE の一言で、兼好の脳内計算だけが止まった。

洗濯物の向こうにある帰る場所。それが、この章の始まりだった。

人の機嫌は天気予報より難しい。晴れマークでも傘が要る日がある。兼好はそのことを、だいたい濡れてから思い出す。

『徒然草』は七百年も前の本である。ところが兼好が読むと、なぜか今夜の恋愛相談に見えてくる。

兼好は人を見るとき、表情より先に間を見る。返事までの一秒、カップを置く速さ、ため息の深さ。その癖は研究者時代から変わらない。今日はシャツの間隔を几帳面に整える。そこに、言葉より正確な情報が混じっていた。

「帰る場所には、労働も付いてくるんだすな。」

兼好は笑っていたが、逃げ道まで用意してくれる笑顔ではなかった。

兼好は内心で一つ仮説を立て、三秒後にもう一つ立てた。仮説が増えるほど真実から遠ざかるのも、この男の研究上の特徴である。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

財布の中身は数えられる。会いたい気持ちは数えにくい。兼好は数えにくいものほど、つい後回しにしてきた。

人間は、自分に都合のよい情報だけを驚くほど上手に読む。兼好は特にその能力が高かった。帰宅した玲子に褒められるという事実から、彼は三段飛ばしで結論へ行く。

「きれいに干すのね。」

その言葉を言った玲子の方が、兼好よりずっと平然としていた。

『つまり、これはそういうことや』と兼好は思った。何が『そういうこと』なのかは誰にも分からない。玲子ならこの時点で『結論を急ぐな』と言っただろう。

『徒然草』第137段・第117段・第155段・第190段の言葉を思い出しかけたが、都合が悪いので途中でやめた。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

誰かと暮らすことは、正しさを競うことではない。歯磨き粉の蓋や洗濯物の向きのような、小さな不一致を毎日処理する仕事である。

笑い話だった空気が、ふいに薄くなる瞬間がある。二人で夜の珈琲を飲む。そのとき兼好は、いつもの冗談を口にするまで半拍遅れた。半拍の遅れは、彼にとってほとんど告白に等しい。

「褒められると伸びるタイプです。」

兼好は説明を足さなかった。足さない方が効く言葉もある。

相手の目は笑っていなかった。兼好はやっと、これは自分の機知で片づける場面ではないと理解する。理解したときには、大抵もう遅い。

洗濯物の向こうにある帰る場所という言葉が、急に冗談ではなくなる。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

『人生はポートフォリオや』と兼好は言いたがる。だが本当に大切なものは、分散しすぎると薄くなる。そこだけは投資理論が役に立たない。

ここで、兼好の世界だけが劇画になる。普段は軽口ばかりの男が、翌朝も珈琲を飲もうと約束する瞬間だけ妙に真面目な顔をする。玲子はその落差が嫌いではない。だからこそ腹も立つ。

「徒然草には、そこまで書いてへん！」

兼好の声は静かだった。兼好にとって、静かな声はだいたい警報である。

兼好は、自分が本当に大切にしているものを、いつも最後の一行でしか言わない。前の九行を冗談で埋めてから、十行目だけ本音にする。臆病者の文章作法だった。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

恋は分析できる。分析した瞬間に壊れることがある、という意味で。

兼好は一度スマホを伏せた。画面を伏せても現実には伏せられない。それを発見するたび、彼は少しだけ大人になる。

夜、兼好は『徒然草』を開いた。第137段・第117段・第155段・第190段。

「花は盛りに。よき友三つあり。先づ機嫌を知るべし。妻といふものこそ。」

古典を読むとき、兼好には二つの癖がある。一つは現代語に勝手に訳すこと。もう一つは、自分に都合の悪い部分を哲学的余白と呼んで飛ばすことだ。

今日の出来事は、LINEで洗濯指令が来るの余韻がまだ部屋に残っている。それを七百年前の言葉に重ねると、最初は自分を正当化できるように見えた。だが読み返すほど、正当化されていないのは自分の方だと気づく。

古典は便利な言い訳ではない。時間を越えて届く、少し意地の悪い鏡である。

人に値段をつけるのは簡単だ。年収、肩書き、家、学歴。ところが一緒にいて落ち着くかどうかだけは、最後まで単位が見つからない。

兼好が勝ったと思った瞬間、だいたい話は反対へ曲がる。シャツの間隔を几帳面に整えるを思い返すうちに、別の意味が見えてくる。今回も例外ではなかった。

「褒められると伸びるタイプです。」

その瞬間、兼好との距離が一センチだけ変わった気がした。

『話が違う』と兼好は思った。だが、話を勝手に作っていたのは自分である。相手は最初から同じ場所に立っていて、兼好だけが三駅ほど先まで妄想で乗り越していた。

住むとは、鍵を持つことより、洗濯物の場所を知ることに近い。

笑うべきなのか、反省すべきなのか。兼好は両方することにした。順番は、もちろん笑う方が先だった。

玲子の小言を思い出すと、なぜか部屋の温度まで思い出せる。記憶とは、言葉より先に生活の手触りを保存するらしい。

事件の後には、生活が残る。大げさな恋愛論の後にも、皿は洗わなければならないし、帰宅した玲子に褒められるが思わぬ形で自分へ返ってくることもある。兼好は、この『残るもの』に弱かった。

「きれいに干すのね。」

冗談で受け流すには、玲子の目が少し真面目すぎた。

派手な言葉より、何気ない指示や小言の方が長く耳に残る。玲子との関係も、ナリンとの仕事も、早江との緊張も、最後には暮らしの手触りに変わっていった。

洗濯物の向こうにある帰る場所。兼好はその意味を、少しずつ違う角度から知り始めていた。その夜も『徒然草』は何も言わず、机の上で開かれたままだった。言い訳に使われることに慣れた本の顔で。

兼好は笑いを逃げ道にする。けれど笑わせたあとに残る沈黙からは逃げられない。そこに本音が座って待っている。

章の終わりに、兼好は一度だけ立ち止まった。二人で夜の珈琲を飲むの後始末をする羽目になる。そこまで来てようやく、始まりの自分が何を勘違いしていたのか見える。

「洗濯物、干しておいて。」

玲子・LINEの言い方には、質問の形をした判決が混じっていた。

『徒然草』第137段・第117段・第155段・第190段の一節は、朝に読んだときより少し重くなっていた。古典の言葉が変わったのではない。読む男の事情が増えただけだ。

家は豪華さで決まらない。小言の声がどこから飛んでくるかを知っている場所が、家になることもある。

そして次の朝、兼好はまた珈琲を淹れる。人間は悟っても腹が減るし、恋をしても洗濯物は乾かさねばならない。人は損得で動く。けれど、損得だけで暮らせるほど、人は効率的にできていない。

古典を読むとは、昔の人をありがたがることではない。自分の言い訳が昔から使い古されていたと知ることでもある。兼好には、それがよく効いた。

あとがき

兼好は、最後まで完全には悟りません。悟ってしまったら、この物語は終わってしまうからです。

彼は自由を欲しがり、女に値踏みされるのを嫌がりながら、誰より相手の暮らしや資産を値踏みしてきました。中国では愛を KPI にされ、バンコクでは能力を査定され、東京では玲子に日常を査定されます。それでも最後に残ったのは、勝ち負けでも資産でもありませんでした。『おかえり』と『洗濯物、干しておいて』。この二つが同じ関係の中にあることこそ、たぶん生活です。

『徒然草』は、完成されたものばかりを愛でるなと教え、潮時を知れと教え、よき友を選べと教えます。けれど令和の兼好が学んだのは、もう少しくだらなくて具体的でした。満開でない花も、機嫌の悪い朝も、割り勘の夜も、洗濯物の間隔も、全部まとめて人生なのだということです。

明日の兼好は、たぶんまた余計な一言を言います。玲子は新聞かクッションを投げるでしょう。それでも朝になれば、珈琲の香りがする。その程度の幸福が、案外いちばん長持ちするのかもしれない。

『徒然草』との対応メモ

第8段 色欲が人の心を惑わすという有名な一節。本作では、兼好が善意・好意・恋を都合よく混同するたびに登場。

第10段 住まいの佇まいを語る段。本作では『豪華な家』と『帰る場所』の違いへ接続。

第52段 仁和寺の法師。本作では、目的や意味を途中まで理解して満足する兼好の恋愛判断の比喩。

第75段 徒然と独居。本作では『一人で自由』と『一人で寂しい』の境界を笑いにする。

第92段 二つの矢を持つな。本作ではバックアップ恋愛、逃げ道、二股の自己正当化を戒める。

第109段 高名の木登り。危ないのは降り際。本作では恋愛・仕事・海外逃亡の『終わらせ方』に対応。

第117段 よき友三つあり。本作では『相手が何をくれるか』ではなく『自分は相手に何を渡せるか』へ反転。

第137段 花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。本作の中心。若さ、完璧さ、最高潮だけを愛するなという主題。

第155段 先づ機嫌を知るべし。本作では潮時、撤退、転職、帰国、相手の機嫌を読む技術まで拡張。

第190段 妻といふものこそ、男の持つまじきものなれ。兼好が結婚逃亡の言い訳に使い、玲子に論破される。

令和の一句

帰る家 コffeeと愚痴と 洗濯物